学のための学を！

伊藤　益
人文社会科学研究科教授

鉄道を愛した男

二〇〇一年九月二四日、ひとりの友を喪った。淑徳大学教授阿内正弘、享年四二。どこ（どの地）で亡くなったのか、厳密にはわからない。上越線の電車に乗ったまま亡くなり、死亡時刻も特定できないからである。死亡原因は、心臓疾患によるものとされた。だが、心臓のどの部分に病魔が生じたのか、それもまた定かでない。阿内君の死は、謎に包まれていて、一切が判然としない。しかし、一点だけ確かなことがある。彼が、生涯にわたって鉄道を愛し続けたことだ。

阿内君は、本学大学院哲学・思想研究科の出身。西欧理性主義が内包する諸問題に鋭く切り込んだ気鋭の哲学徒だった。才気漲る論文の筆致（主著『理性の光と闇ー理性の伝統から共感の伝統へ』北樹出版）は、彼が生涯の大半を哲学という学問に捧げたことを如実に物語っている。

一見、彼は、哲学すること以外に何の関心も示さない男のように見えた。ところが、彼には、他人からはとうてい理解されようもない、孤独な趣味があった。それは、ひとりで鉄道に乗ることだった。彼が日本国内のすべての鉄道路線の完乗をめざして鉄道に乗りはじめたのは、筆者と出会ったころ、一九八三年ころのことだったという。それから十年余り後、彼は、全鉄道路線の完乗を果たした。その後は、さらに、二度目の完乗をめざして鉄道に乗り続けた。近しい人びとは、「なぜそれほどまでに鉄道にこだわるのか」「何のために鉄道に乗り続けるのか」と問うた。彼の答えは、「何の目的もない。ただ乗りたいから乗るのだ」というものだった。人びとが理解に苦しんだことはいうまでもない。

阿内君は、郊外の田園風景や、ビルの林立する都市の夜景を眺めるためではなく、鉄道に乗るために鉄道に乗った。ひとは、

このことの意味を理解できない。ある行為は、かならず何らかの目的をめがけての手段でなければならない、と考えるからである。しかし、すべての人間の行為が、目的を求める手段だという認識は、思考の貧困を物語っていないだろうか。ただその行為を好むがゆえに行為するという在り方も、十分に成り立ちうるのではないか。

キネーシスとエネルゲイア

いつのことだったかは忘れた。誰から聞いたのかも憶えていない。しかし、キネーシスとエネルゲイアについてのある解釈が、筆者の脳裏には、折に触れて瞭然と蘇る。それは、つぎのようなものだ。

ギリシア人の考えでは、「運動」(活動) は二種類に分かれる。キネーシスとエネルゲイアとに。キネーシスとは、運動の外部に運動の目的があるような運動のこと。たとえば、健康になるために歩くとか、学校に行くためにバスに乗るといった運動である。一方、エネルゲイアとは、運動それ自体の内部に運動の目的があるような運動をいう。たとえば、山に登るために山に登るとか、走りたいがゆえに走るとか。

筆者のかすかな記憶によれば、こうした二種類の運動に言及した論者は、現代人の発想の仕方について、およそつぎのように述べた。現代人にとって運動とは、キネーシスでしかない。わたしたちは、つねに、何か他のもののために運動しようとする。だから、わたしたちの運動はいつも他律的である。しかし、わたしたちが自律的であるためには、そのものそれ自体のためにそのものをなすこと、すなわちエネルゲイアが必要ではないか。

筆者は、筑波大学に赴任する以前、福祉系の私立大学に勤務していた。そこでは、勉強するということが、単位を取ることのみならず、福祉関係のさまざまな資格をとることに直結していた。大学当局がそのことを「売り」にしており、「勉強＝資格」という認識は学生のあいだに、自律的にではなく他律的に広まっていた。筆者のように哲学・倫理学を専門とする者にとって、そのような認識を植えつけられた学生たちに何かを伝えることは至難だった。筆者は、例年の最終の授業で、エネルゲイアの重要性を説いた。「勉強＝資格」という考え方を批判する筆者の論が、どこまで学生の注意を惹いたか、はなはだこころもとない。

筑波大学に赴任し、主として人文学類の学生を教えるようになったいまも、筆者の主張は基本的に変わっていない。人文の学こそ、学それ自体を目的とすべきだ、というこのが、筆者の信念である。だが、この信念は、容易には学生たちの賛同を得ることができない。彼らの多くは、「卒業するた

め」「教員・公務員になるため」という「～のため型」の学問、すなわちキネーシスとしての学問をめざしているからだ。

「学のための学」と「パンのための学」

人間には、理由なく他者を愛するという心性がある。たとえば、父母が子を愛する心情は、功利的な理由づけとはあくまでも無縁である。学問もまた、このような心性を基礎として成り立つ側面をもつのではないか。すなわち、ただ知りたい（知を愛する）がゆえに知ろうとする、エネルゲイアとしての学問もありうるのではないだろうか。いま、かりにそれを「学のための学」と呼ぶことにしよう。これに対して、キネーシス型の学問は、糧を得るための学問、「パンのため学」と規定することができるだろう。

わたしたちは、ともすれば、「パンのための学」を重視し、「学のための学」を軽視する。否、昨今は、大学の在校生・卒業生はもとより、アカデミズムのなかに身を置いている大学院生や研究者でさえも、「学のための学」から遠く離れた地点に立っているように見える。大学人が「競争的研究費」というシステムの導入を座視している姿は、そのことを物語って余りあるように思える。

どこで読んだのかも、著者の名も忘れてしまったが、五、六年ほど前、『京都帝国大学の挑戦』という本を読んだことがある。それによれば、東京帝国大学法学部が官僚養成を主眼とする実践教育に重きを置いていたのに対して、京都帝国大学草創期の法学部は、法の本質を理論的に解明する研究を重視し、その一環として学生に卒業論文を課したという。草創期の京都帝国大学法学部の教官たちは、官僚養成をめざした実践教育を「パンのための学」（ブロート・ヴィッセンシャフト）と呼び、他方、自分たちがめざす理論的な教育を「純粋学」（ライネ・ヴィッセンシャフト）と呼んだ。「純粋学」とは、筆者のいう「学のための学」とほぼ同義と見てよいだろう。京都帝国大学法学部がめざした「学のための学」の試みは、政府の政治的強制や民間の怨嗟の声に引き摺られて、やがて挫折する。官僚の養成に対して背を向ける京都帝国大学法学部の教育姿勢は、外圧によって、基本方針の転換を余儀なくされたのだった。

「純粋学」あるいは「学のための学」を、知ることを求めて知るという次元に具体化しながら、大学人の日常性のなかに取り入れよう、というのが筆者のささやかな提言である。しかし、上に述べた京都帝国大学法学部の事例からも窺い知られるように、「学のための学」は、普通人の日常生活にとって有益・有効ではないという理由で、ともすれば排斥される傾向にある。それが

国立大学において行われる場合には、税金の無駄遣いとして、悪罵の対象にすらなってしまう。こうした現状のなかで、「競争的研究費」の配分額を著しく削減されながら、なお「学のための学」にこだわり続けることは、学者にとって自殺行為に等しいといってもよいだろう。しかし、それでもなお、筆者は「学のための学」に固執する。学問とは、実践的・功利的価値を超えて文化的価値を創出するものだと信ずるからだ。

「文化」を倭語で表わせば「みやび」である。「みやび」は、日常性・土着性に貫かれた「ひなび」と対立する概念で、端的に表現するならば、経済的生活基盤に執着しない人びとが知的遊戯に興ずることによって醸成する独特な雰囲気の謂であろう。学問の世界で「パンのための学」が大道を練り歩き、「学のための学」が雲散霧消しようとしている現実は、「みやび」の危機を意味している。「みやび」が顧みられず、「ひなび」が蔓延するとき、人間的生は、獣性のただなかへと後退してゆく。そればかりではない。人間的生にのみ付随するはずの精神のやすらぎもまた、「みやび」とともに消え失せてしまうだろう。このことを重く見るならば、大学という、もっとも「みやび」を体現しやすい環境のなかで、「学のための学」を守りぬくことが、わたしたちの使命のように思えてならない。

鉄道を愛した男、阿内正弘君は、鉄道に乗るために鉄道に乗って死んでいった。思えばはかない生であった。しかし、彼は幸せだったと思う。筆者は、彼のように、知るために知ることを行ずるさなかに死んでゆきたい、と切に願っている。

(いとう　すすむ／哲学・思想)